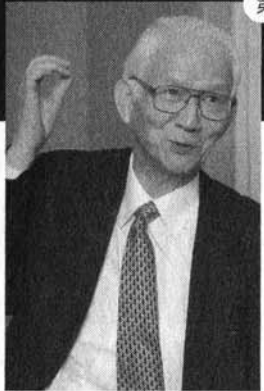


第5回 上田惇生先生編——⑤



ドラッカー学会代表 上田惇生先生:1938年埼玉県生まれ。生前のドラッカーとも親交が厚く、「マネジメント」を始めとするドラッカー主要著作の全てを翻訳している。著書に「ドラッカー入門」「ドラッカー 時代を超える言葉」(ともにダイヤモンド社刊)がある。

ドラッカーの問題意識に対し
社会の進歩は遅すぎるのではないか

ドラッカーの魅力と
「真摯さ」という訳語

岩崎…上田先生がドラッカーに惹かれたというか、魅力を感じたのはどういう所だったんですか？

上田…やっぱり、すごくわかりやすいから。言っていることの魅力もそうですけど、波長が合うっていうのもありますね。文章は短ければ短いほどいいって感覚を私は持っているんですけども、短い文章で翻訳すると、ドラッカーの場合はびたっといくんですよ。それだけに、いじくり甲斐もありますね。「integrity」なんて言葉は、最初は「誠実さ」みたいに訳しているんですよ。でもそれを、田んぼのあぜ道とかを歩きながら推敲して、訳語を探して。これはどう考えたって「真摯さ」しかないやっつて。そうやって3日も4日も考えてたやつがですね、岩崎さんの目に留まって、「もしドラ」の最初の方に出てくるのはね、これはものすごくうれしいですよ！あの一語にはどれだけコストが、時間がかかっているかってね。映

画とかと一緒に、どれだけフィルムを捨てたかによって、良し悪しが変わってくるってのは本当にそうね。

岩崎…そうですね。この裏にはたくさんフィルムが捨てられているんですね。もちろん「マネジメント」からもだいたい捨てられているし、先生の方で言葉も捨てられているし。僕はこの「真摯さ」という言葉に、と言いますか、「マネジャーの資質」という部分にすごく惹かれてですね。そこに来るとドラッカーの筆が熱くなるというか。熱がこもっているんですよ。

上田…やっぱりその真摯さにも共通するんですけども、ドラッカーのすごさは真摯さですね。原義的に言って、首尾一貫しているんですよ。その方法論も問題意識も処女作からずっと繋がっている。そしてそれが今でも通じちゃうんですよ。ドラッカーの問題意識が変わらず通用するというのは、これはある意味でいうと、世の中の進歩の度合いが遅すぎるということなんです。

ドラッカーが指摘した
社会の諸問題

上田…もちろん、事実上過ぎ去ってしまった問題っていうのもあるんだ。今更言ってもしょうがないよっていうね。例えばイギリスやフランスが一つの経済圏になっちゃって、日本はそれに入りにくくなって困ったなんていうのは、ドラッカーが言った通りなんだけど、それはもう当たり前の話でしょ？でも、ドラッカーが取り上げた問題で、そのまま解決しないではっばらかされている問題っていうのはめちゃくちゃあるわけですよ。少子高齢化の問題だってそうだし、たとえば高齢者の働く機会なんて問題は、ドラッカーはやっぱり65歳で定年するのは間違いだってはっきり言っているんですね。そう言った時、アメリカ

では65歳定年になってたけれども日本ではまだ55歳でしたからね。やっとなんか日本もそこまで来たわけですけども、まだ延ばせられて、まだ延ばせられて

ラッカーは言っている。でも延ばすには条件があって、それがまだ満たせてないのね。

高齢化社会に対する
ドラッカーの処方箋とは

上田…それは何かかっていうと、ボケたということ。それを本人が自覚して認められる、そういう方法を開発しないといけない。傷つかずに、ボケたということがわかる方法ね。その上で定年を延長、あるいはなくさない社会がもたないわけよ。働いている人間が、何人も年寄り抱えるわけにはいかないわけ。でもドラッカーは、それでもまだ問題が残ると言っている。80、90がいるじゃないかと。だからもちろん難しい問題なんだけど、こういう種類の問題を正面から取り上げてないでしょ？

岩崎…そうですね。見て見ぬふりというか。

上田…そう。見て見ぬふり。今だと著しいのはエネルギーや環境ですかね。知ってても解決できないからほっとく。そういう問題っていうのは、まだまだいっぱいあるんですよ。